

第3回（仮称）雫石町まちづくり協働推進条例検討委員会 会議概要

日時：平成29年7月21日（金）午後6：30～8：40

場所：雫石町役場 3階 大会議室東側

出席者：■委員（12名）

1号委員：大村悦正、舛澤誠一、谷地良一、庄司六十四

2号委員：千葉茂人、澤口文香

3号委員：中野真知子、山崎忍、原正人、鈴木勝

4号委員：広田純一、小野寺浩樹

■庶務担当（4名）

企画財政課地域づくり推進室：古川端琴也、柴田慈幸、藤原瑞枝、井上岳丸

■検討チーム（11名）

生涯学習課 大橋育代、佐藤洋、齊藤慶祐、川村佳樹、田村峻

NPO法人いわて地域づくり支援センター：若菜千穂

NPO法人まちサポ雫石：櫻田七海、工藤昭敏

地域づくりサポーター：増谷光記、田山まり、秀島杏奈

■欠席委員（4名）

2号委員：三輪亨、袖林広見、中川真理子、佐々木浩子

■オブザーバー（1名）

岩手大学農学部2年 澤田あおい

1. 開会（企画財政課 柴田）

2. 委員長挨拶（岩手大学広田教授）

○前回は、「協働とはどういうものか、何のために必要か」をテーマに話し合い、小野寺氏にもアドバイスを受けた。

○協働は予め回答が決まっているものではないので、他の人はどのように考えているか互いに比較しながら話し合い、皆さんで雫石の協働のカタチを作ってほしい。

3. 前回の振り返り

【別紙1】資料4～6ページにより、NPO法人いわて地域づくり支援センター若菜理事が説明

4. 協働についてのワークショップ

【別紙2】により、NPO法人いわて地域づくり支援センター若菜氏が進行

（小野寺委員）

○7月10日の視察先は、33の地域協議体のうち、事業を動かしている猿沢地区と、住民の意見を吸い上げ、人を巻き込む仕組みづくりに取り組んでいる川崎地区を見ていただいた。

○イベントや事業に、地域の人を巻き込んでいかないと、参加者が途絶えてしまう、担い手が育成できなくなるということがある。具体的に雫石ではどう進めていくかについては、しっかりとした協働の定義が条例として骨太の部分が決まらなるとそういう手法の部分には移れないと思う。

○協働の定義について、協働と共同の定義の違いは？という意見があるのですが、共同は立場・生活を同じにすること、協働は異なった主体が同じ仕事をする事、協働は「？」であり、答えはあるようでない、ないようである。雫石ではどうしていくか、皆さんが腑に落ちる定義を考えて頂かなければならない。こういう状況だからこそ協働していこう、ということを考えていただきたい。

■ワークのテーマ

①地域の課題、地域と関わる上での行政の課題を出し合う。

②なぜ協働が必要か。

1班：大村悦正、千葉茂人、中野真知子、櫻田七海、田村峻、増谷光記、井上岳丸

2班：庄司六十四、鈴木勝、田山まり、藤原瑞枝、佐藤洋

3班：原正人、谷地良一、秀島杏奈、齋藤慶佑、大橋育代、柴田慈幸、工藤昭敏

4班：舛澤誠一、澤口文香、山崎忍、川村佳樹、若菜千穂

⇒検討結果まとめ【別紙1】

■テーマ①のベストオブ地域課題・行政課題の発表

1班：不活性化・行政サービスの低下

2班：横の連携・意見の吸い上げができていない

3班：人間らしい生活がしにくくなる・昔に慣れている

4班：一部の人の負担が増えて地域が弱体化する・地域から頼まれることが多くなって本来の行政サービスができなくなる負のスパイラルに陥っている

■情報提供（事務局藤原）【資料 人口減少の何が問題か】

■テーマ②の発表

4班（発表者：山崎・若菜）

- ・協働とは、「口から始まる協働」。何もできない、自分はこれができるかを宣言することが次のステップアップにつながる、という発想。とにかく思っていることを発信することを協働。
- ・できる人が動き、できない人もその動きをみることによって感じる事が変化になる。地域側では、動くことによって、変化が生まれる、行政側も、「これは地域でやってください」と堂々と言えることが出てくる。
- ・みんなが動いて、町が活性化するという大前提があるが、まずその最初の糸口として口から始まる協働。
- ・協働したらどうなるか、と置き換えて検討した結果、住民が課題を共有し、解決できるようになること、今やっていない人もやれるようになる、という地域が変わっていくことになった。
- ・そのために、まず話すことからスタートし、いずれは体が動き、地域が変わることによって行政も

変わる、町民の自主性が強くなっていくことで行政サービスも良くなっていく、最終的に町全体が活性化するという正の循環になる。

3班（発表者：工藤・原）

- 地区を維持しようということ。
- ステータスの変化もあり、やる事も選択するために協働が必要なのではないか。地区を維持するにも関わるが、災害や行事の時に地区の人が分かるために協働して顔を合わせる、世代間で達成感を持ってみんなで集まる、楽しく集まるということが協働ではないか。
- 1人でも楽しい人生を全うするために協働が必要。一人暮らしの人が楽しく暮らすためには一人では生きられない、みんなに支えてもらわなければならないから協働が必要。

2班（発表者：鈴木）

- 協働が必要かは○、△、×に分けられる。10代20代の方は協働を意識していない。働きだした20代30代の方もまだまだ意識していない。40代50代の方は忙しくて考えてもらえない。60代70代が協働したら何か助けてくれるのか？と感じると思う。
- 自立している人には協働は必要ないので、時と場合により協働は必要。
- 世代によって感覚はちがうが、支え合ったり、行政と連携したりしていくことで必要性が生まれてくる。
- 「協働」という言葉も、「支え合う」ならしっくりくる。「共働」＝ともに働きかける、という言葉を作った。「話し合う」、一緒に頑張るのではなく、支え合うということ。
- 窮屈な地域活動は嫌、大人も子供も忙しすぎる。のびのびと暮らすためには何が必要かと考えたとき、私たちの幸せはお金がガソリン。お金に余裕があれば心に余裕ができてくる、心の余裕ができれば、地域の課題が解決できる。

1班（櫻田・増谷・井上）

- 人と人のつながりを作り、暮らしの安全のために協働は必要だが、相手の負担になるような合意のない協働はいらぬ。
- 必要な協働として、災害時、防災時に普段のつながりが大事。都会は人やお金がありますが、田舎は人力でカバーしていることも多いのではないかと、普段から顔を合わせておく体育行事をすることなどは必要。
- 栗石地区の体育会は、各行政区から3人ずつ体育推進員を出していて、様々な競技行事をしているが、公民館職員も体育会の事務局的に扱われ、不満も出ている。
- 体育会の設立趣旨がスポーツを通じて地域のつながり、世代間交流をすること、と考えると、体育会は地区ごとにある唯一の組織であり、体育会を地域づくり会議に変えて、体育会行事だけでなく草刈り、文化的な活動など様々な活動を行っていくと、いろんなことが上手くいくのではないかと。
- お金と人さえいれば協働は必要ないという意見も出たが、東日本大震災のような災害が起きれば経済が回らない、職員も現場に全員が対応できるわけではないので、普段からの役割分担をしておくことによって暮らしの安全が守られることが協働の意義が出てくる。

5. 総括

(小野寺委員)

- 協働の必要性について、共通して出てきたのは、課題を共有しましょう、時代の変化に住民・行政が対応し、地域の総力戦につなげていこう、ということだった。
- 災害というキーワードが出てきましたが、災害時に一番協働が「見える化」する。有事の備えのために平時の協働というところがキーワードで出て来ていて、雫石において、協働は必要ではあるけれども、具体的に言うと課題を共有して、みんなで課題を発信しながら、取組んでいくことが大事で最終的に一人でも楽しめる人生、のびのび暮らせる人生に繋がっていくというのが見えてきた。
- 雫石の協働の定義に置き換えていくときは、課題の共有までにするのか、行動することまでにするのかは最終的な議論が必要。
- 冒頭に「きょうどう」の3種類のところで協働は？としたが、協働は「課題を共有する」ということ。共同はライフトゥギャザー、協同はワークトゥギャザー、協働は課題、みんなでやっていかなければならないことを共有する、タスクトゥギャザー。そこまで今日の話し合いで導き出せたのは、良い成果が出た話し合いだった。

(広田委員長)

- 口から始まる協働も、課題を共有するために誰かが言い出さなければならないという意味だし、正直に言う場・雰囲気がない、というのも課題なのだろうなと感じた。そこを突破しようというのが口から始まる協働だと思うが、課題を言っても聞く人がいないと効果がないと思うので、そういうところがこの意見が現状をよく表していると思う。
- 一人でも楽しめる人生というのも印象的なフレーズであって、協働を何のためにするのかの最後行きつくところ。
- どの班からも出ていたのは「忙しい」ということ。誰がそれを指示しているのかということ、誰ということでもない。これまでの流れで雫石は体育会系で、自分たちで規定して忙しくなっているのかもしれない。大人も子供も忙しくて、必ずしもそれが幸せではない、という状況のようだ。逆に言うと、課題を共有するに関わると思うのだけど、なぜだか忙しい、やめた方がいいと思いながら続けてしまうという課題を共有して、少しでも効率化して、時間を生み出してのびのびと暮らしていくのが、みんなで楽しく過ごしていく時間を作っていくというのが大きな課題と感じた。
- まだ大まかだが、協働の姿や達成すべき目標というのがちょっとずつ見えて来ている。

6. その他

- ・次回は、検討チームと合同のワークを8月中に開催する日程を調整して連絡することとした。テーマは協働する相手との関係性、対等について。

7. 閉会 (企画財政課 柴田)

【別紙1】

第4回（7月21日開催）グループワーク結果まとめ

【検討テーマ】

- ①なぜ協働が必要か、協働をしないとどうなるか
- ②協働の定義

①なぜ協働が必要か、協働をしないとどうなるか

☆（協働をしないと）地域と行政の間に負のスパイラルが生じる

⇒地域が弱体化すると行政も弱体化する。

【住民】

- ・ やる人とやらない人に温度差がある。
 - 「生きることに精一杯」と断られる。行事への出席者が減る。若い人が集まらない。
 - 同じ人が何役もさせられる。
- ・ 地域の文化が薄れていく。
 - 祭りや〇〇大会等行政区の行事がなくなる。
 - 防犯安全協会がなくなる。
 - 自治会活動がマンネリ化していく。
- ・ 地域が弱体化する。協力する意思がなくなり、個人主義になる。
 - 地域の課題を共有化できなくなる。
 - 行政や一部の人に頼りっぱなしだと、有事の際に何もできなくなる。
 - 防災活動が成り立たない。
 - 地域に諦めが目に見えてある。不活性化する。
 - 近所同士で争いごとが多くなる。
 - みんなそれぞれで主張してまとまらなくなる。
 - 他人に関心を持たなくなる。
 - 地区が荒れる。（心も土地も）。集会所、公民館が老朽化する。
 - 結いの精神がなくなり、他の人をみてあげられなくなる。
 - 人と人のつながりがなくなってしまふ。
- ・ 若い人は出て行ったきり帰って来ない。人口減少が加速し、高齢化が進む。
 - 地区がつまらなくなり、若い人たちも出ていく。
 - 農業の担い手がいなくなる。

- 支援される人が支援する人より増え、支援する人の負担が増える。
- 空き家が増えて治安が悪くなる。
- おひとり様が増え、さらに問題が悪化する。
- 孤独死が増える。
- 少子化により、子どもの健全育成が不安になる。

【行政】

- ・ 地域が弱体化し、さらに町民から本来の仕事以外の頼まれごとが増える。
 - 何度もやれやれと言われる。雑用係にされる。
 - 行政から頼みたいことも頼めなくなる。
 - 住民からの要望へのフットワークが重い。
 - 災害など有事の際、行政だけでは何もできない。
- ・ 税金が減る。職員も減る。行政サービスが思うようにできなくなる。行政も弱体化する。
 - 町民からの不満が増える。
 - 行政サービスにお金がかかるようになる。
 - 未来への借金が増えている。
 - 負担が増える。職員が死んじゃう。休みがない。忙しい。
 - 気持ちが離れる。(どっちも面白くなくなる)
 - 業務が忙しすぎて、地域行事に関わる時間が取れない。
 -
- ・ 事業の対象者そのものが減っている。
- ・ 担当課だけで解決しない課題が増えている。
 - ニーズが広くなり、すぐ対応できない。

②なぜ、協働が必要か。協働するとどうなるか。どんな協働が必要か。

人と人のつながりをつくり、暮らしの安心安全のための協働は必要だが、
相手の負担になる合意のない協働はいらない。

- ・ これからも地区を維持するために協働は必要。住んでよかったと思えるまちづくりのため。
 - ひとつの目的に向かって世代間で協力して達成感を得られる。
 - 災害や行事の時に、地区の人が分かるため。
 - 長生きすることが素晴らしいことだと言える世の中にするため。
 - 一人でも楽しい人生を全うするため。

- 地域の課題を改善することは、個人ではできない。
- 地域の人たちの考え方を変える仕組み作り。
- 楽しく仲良く集まるため。

- ・ 「やらない人」や「やれない人」が「やる人」になるのが協働の力
 - 住民が課題を共有し、解決できる。
 - 人のつながりが、できない人をできる人にする。
 - 協働で、自分から動きづらい世の中が変わる。
 - できないことができるようになる可能性が広がる。
 - 面倒なことをみんなで解決する。
 - なんでも自分たちでやる地域になる。
 - 不平不満が減る。
 - 若い人も興味を持つ。
 - 幼いころの協働体験は大切。親が楽しそうにする。

- ・ 協働によって、町が活性化する。
 - 農業にも組織ができ、協働で育むことができる。

- ・ 協働によって、行政も変わる。
 - 行政も「それは地域でお願い」と言える状況になる。
 - 町民の自主性が強くなると、行政サービスが向上する。
 - 行政サービスの経費を抑えられるかもしれない。
 - 今は地域の下僕だが、協働が実現すると地域との対等のパートナーになれる。

- ・ 必要な協働と必要ない協働
 - 押しつけの協働はいらない。暮らしの安全安心のための協働は必要。
 - 財政を人力でカバーする協働は必要。
 - 役場が事務局を地域に押し付ける協働は不要。
 - 地区や地域の交流や絆は必要だが、体育行事のための協働は不要。
 - 行政も人間だから、限界があることを住民も理解する。
 - 多様化に対応するためにも協働は必要。

- ・ 本音で話せる環境が大事。～耳からはじめる協働・口からはじまる協働～
 - ひとりではさみしいということに気づき、まずは動く。動けなくても語り合う。
 - 話し合いから始まる協働。不平不満を正々堂々と言える環境をつくり、みんなで共有する。
 - 一人に負担を押し付けない。
 - お互いにできること、できないことを見直す。やることを選択する。